



ウククン、ウククン お乳のように

にしやま れい こ
【西山 禮子・岡山県】

ウククン、ウククン、ママのお乳を飲むようにA子ちゃんはメロンの滴を飲んだ。それは50年前の夏のことだった。

A子ちゃんは5歳。白血病治療のため、遠い沖縄県から兵庫県の病院に入院していた。当時、私は看護学生でA子ちゃんの病棟で実習していた。小児科実習を終え、次の内科病棟にいた時、ママが息を切らして来られ「西山さん、A子はここ1週間、熱で何も食べていないのよ。今日、メロンを買ってきたら『西山の看護婦さんと食べたい』と言っているのよ、どうかお願いします」と言って、ためらう私を引っ張って小児科病棟に連れて行った。「一緒に食べてやってください」と懇願され、その雰囲気の中で私は覚悟を決めてA子ちゃんとメロンを食べることにした。メロンの滴を小さなお茶碗にためてはひとさじずつゆっくりとA子ちゃんの口に運んだ。A子ちゃんは全身の力でそれを受けた。時折ジッと私を見て「カンゴクさんも食べて」と血のにじんだ乾いた唇で言った。私はとうとうメロンの一切れを食べてしまった。ゆっくりと時間が流れていき、A子ちゃんは最後の1滴をウククンと飲んで「カンゴクさんありがと」とかすかな声で言った。その翌日、A子ちゃんはママに抱かれて小さな命を閉じたのだった。

私は「患者さんから物をいただくのは厳禁、という鉄則を犯してしまった。看護倫理に背いたことで悩み、先生に相談した。先生は「切羽詰まった時、A子ちゃんとメロンを食べるという自分自身の良心を行使したまでのこと。それは看護倫理に背くものではありません」と諭してくださった。先生の影響もあって、私は看護科教員の道を選び、37年間生徒たちを育んできた。

私は今、69歳。郷里の精神科病院でリスクマネジャーをしている。病院ではかつての教え子たちが生き生きと働き、地域医療をけん引している。私の心の中にはA子ちゃんの「ウククン、ウククン」が今も生きている。